



子育ての ココが聞きたい!

!!VOL. final!!



非認知能力って何だろう？

「非認知能力」という言葉を聞いたことがありますか？
近年、教育・保育の現場ではこの能力が注目され、重要視されるようになってきました。
「非認知能力」を理解するには、この能力の対となる「認知能力」も知る必要があります。「認知能力」は記憶や思考、理解、計算などの力のことで、テストの点数で計ることのできる脳の知的機能のことです。
一方「非」認知能力は、自分を認め大切に思う「自己肯定感」、友達との関係を築き助け合う「社会性」、物事に没頭し取り組む力「集中力」などの、テストでは分からない“人間の好ましさ”を表す能力のことを言います。
ついつい、数値化できて分かりやすい「認知能力」に注目しがちですが、子どもの育ちには「認知能力」「非認知能力」共にバランスよく育てる必要があります。
この二つの能力を木に例えると「認知能力」は、木の“幹や枝、葉”。そして、「非認知能力」は、大地に深く張り巡らされる“根”です。
木は大地にどっしりと根をはることで太い幹を支えます。さらに根から吸ったたくさんの栄養が枝葉に届くことで広く枝を伸ばし、たくさんの葉をつけることが出来ます。
それと同じように、育ちの基礎としてどっしりと根をはった「非認知能力」の上に、「認知能力」が豊かに育っていくのです。
一つの事に粘り強く関心を持たず、すぐに飽きてしまったり、ちょっとした困難にぶつかるとうすぐに諦めてしまう子どもが「やってみよう→難しいけど頑張る→自分ならできる→達成感」という良い循環を得られるように、「非認知能力」を育てる環境をつくっていきましょう。
「非認知能力」を育てるために、大人は以下の2つのポイントを意識して、子どもと関わりをもってみてください。

ポイント①

【子どもの“楽しい”を見つけ、自由にやらせてあげる】

2歳の娘と川に遊びに行った時、川の中の石をひっくり返してカニを捕まえてあげると「わー!」と嬉しそうに笑いました。
それから娘は川の中の石をひっくり返す事を繰り返し、満足するまで楽しんでいました。
またカニが出てくるかもと、ドキドキしながら自らの手で様々な形の石に触れて遊ぶ。そういった些細な経験を、子どもが“思う存分”楽しむことが、「非認知能力」を育ててくれます。

ポイント②

【ネガティブ感情を受け止め支える】

子どもが様々な困難にぶつかり、悲しみや怒り、くやしきなどのマイナス感情を抱くことがあります。その思いを否定するのではなく受け止め、気持ちの立てなおしを支えてあげることが重要です。ネガティブな感情でも、周りから認められることによって自分らしさを認め肯定する「自己肯定感」などが備わっていきます。

最後になりますが、計12回の連載、ご愛読ありがとうございました。不慣れな執筆で読みにくい点多々あったかと思いますが、たくさんの方にお褒めいただき、応援の言葉もいただきました。私自身この経験を通じてたくさん学びを得ることが出来ました。今までの活動が子育て世帯の力となり、未来を紡ぐ子どもたちの光となることを願っています。

住民福祉課 保育士
太幡 英輝

